

『スタンフォード大学海外研修報告書』

砂川市立病院 放射線科 茅野 伸吾

(1)期待していたこととその結果

8月27日よりアメリカ・スタンフォード大学にて一週間の研修に参加をさせていただきました。

現在、私は脳動脈瘤内の血行動態解析に関して、CTを使用して基礎的検討を行っております。スタンフォード大学では、CFD(Computational Fluid Dynamics)を利用した大血管系の血行動態解析に関する研究を行っていることを研修参加前に読んだ「Lucas Annual Report」で知りましたので、今回の研修でもこの研究に関する講義プログラムもあるものと期待し参加をしました。実際には、この研究に関するプログラムはありませんでしたが、私にとって大変に意義あるエキサイティングな研修であったことは言うまでもありません。

日本でトピックスとされていることが、スタンフォード大学ではそうではなかったこと、MRI や PET が存在・形態・機能診断から、生体の分子レベルの変化を画像化する Molecular Imaging の分野に向かっていることなど、最先端の研究システムを誇るスタンフォード大学から、数年後の未来に展開されるであろう画像診断の世界を垣間見ることができました。また研究に関わるスタッフの並々ならぬ情熱を感じることができました。プロフェッショナルとして自分たちの研究に誇りをもち、その自信と誇りをもって講義してくれる諸先生方の姿にとっても感銘し、学ぶべき姿であると感じました。また講師の先生と対等にディスカッションする諸先輩方の姿は大変に誇らしく、日本の診療放射線技師のレベルの高さを伺えました。

(2)得られた成果とそれをどう生かすか？

これまで私は中枢神経領域におけるCTを主体とした学術活動を行ってきました。Neuro領域のCTに関する講義プログラムでは、日常、脳外科医とディスカッションになることを質問させていただき、大変に参考になる方向性を示していただきました。研修の講義プログラムはMRIが主体となっていた面もありましたが、参加された諸先輩の質問とディスカッションからも、今後の学術活動のアプローチの方法など、たくさんヒントを得ることができました。

講義プログラムから印象を受けたことは、各々のモダリティが果たすべき役割分担がしっかりとなされていることです。アメリカならではの合理的な指向性も働いていることにも要因があるものと思いますが、日本でよく経験する「今まではCTでしかできない検査でしたが、MRIでもできるようになりました。故にどちらの検査をした方が良いか？」的なことが少ない印象を受けました。これは現在、取り組んでいる学術活動が実際の医療にどのようなインパクトを与えていくのか、アプローチ法などを再考すべきチャンスと捉えることができました。

(3)もっとも印象に残ったこと:セミナーとイベント

医療を含めた異文化を学ぶことができた、この研修に参加できたこと自体が私にとって“もっとも印象に残ったこと”です。さらに加えれば、研修に参加されたすばらしい諸先輩方との出会いがあったことです。今回の研修参加者のなかで、一番の若手として参加させていただいた私にとって、普段の学会参加では知り合うことができない、MRIやPETなどのモダリティのエキスパートの方々とは出会えたことは、大変に貴重な経験をさせていただきました。宿舎の食堂で無理を言って特別講義をしてくださいました、辻岡先生、久保先生には大変に感謝申し上げます。

(4)今後の海外研修に期待すること

スタンフォード大学での今回の研修が、技術学会にとって初めて企画する研修であったと伺いました。その1期生として参加できたことは、大変な光栄なことです。

今後たくさんの技術学会の会員の方が、海外の息吹を学べるたくさんの機会を作っていただけることを期待することと、各々のモダリティでの専門技師制度が推進される時代にあって、研修の内容が各々のモダリティに特化したプログラムを選択できるコースが用意されると、大変に魅力を感じます。

